

元島名旭遺跡 2

—建充分調住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2017(平成29)年

高崎市教育委員会
株式会社歴史の杜
三共商事株式会社



元島名旭遺跡2

— 建壳分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2017（平成29）年

高崎市教育委員会
株式会社歴史の杜
三共商事株式会社





例　　言

1. 本書は建売分譲住宅建設に伴う元島名旭遺跡第2次調査（高崎市遺跡番号 690）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は群馬県高崎市元島名町字旭 281 番1、-2、-3、-4、-5に所在する。
3. 発掘調査は平成 29 年 2 月 1 日から平成 29 年 2 月 20 日まで実施した。
4. 発掘調査および整理調査・報告書作成は、高崎市教育委員会の管理の下、三共商事株式会社と委託契約を締結した株式会社歴史の杜が実施した。
5. 発掘調査の体制は下記の通りである。
高崎市教育委員会 矢島浩（監督員）
株式会社歴史の杜 小宮山達雄（調査員）
6. 本書の編集は小宮山が行なった。執筆は I を高崎市教育委員会文化財保護課が、II を村上章義（株式会社歴史の杜）が、他を小宮山が行なった。
7. 本遺跡に関わる図面・写真・遺物は、高崎市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査における重機搬削および埋め戻しは有限会社渡重機工業、測量は株式会社測研に委託した。
9. 発掘調査および整理調査に携わった方々は以下の通りである（敬称略・五十音順）。
発掘調査 青柳哲夫・阿久澤脩彌・荒井克史・五十嵐正宗・石倉和彦・大澤百合子・川端勝・白砂福造・中村恵子・中村博樹・沼本忍
整理作業 新井道・森原信子・深井美紀
10. 発掘調査の実施および報告書の刊行に至る過程で、下記の諸氏、諸機関のご協力を賜った。
記して感謝申し上げます（敬称略・五十音順）。
株式会社大陸不動産・戸所工務所・水田稔・有限会社かねいち地所

凡　　例

1. 本書掲載の「第1回調査区位置図」は高崎市発行 1 / 2, 500 「都市計画基本図」を、「第2回本遺跡の位置と周辺の道路」は国土地理院発行 1 / 25, 000 地形図「前橋」・「高崎」をそれぞれ使用した。
2. 遺構標図の座標については、世界測地系（測地成年 2011）を使用した。図中に示した方位は座標北である。
3. 掘団の縮尺は図中の以下の通りである。掘団図にはスケールを入れて表示している。
遺構 全体図 1 / 80、平面図 1 / 80、断面図 1 / 60、遺物出土状況図 1 / 10。
4. 遺物図内のスクリントーンが示す内容は、以下の通りである。

遺物	付着物	□□□□	磨り面	□□□□	磨り面(光沢あり)	□□□□
----	-----	------	-----	------	-----------	------
5. 土層および遺物の色調は、「新版標準土色図」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、2015）による。
6. 基本土層は、堆積層と人為的攪拌層に大文字のローマ数字を、層相が類似し、同じ層位と推定される層に算用数字を付して枝番とした。遺構覆土層には基本土層に対応する層以外の層に上から算用数字を付した。
7. 基本土層および遺構覆土層の土層注記は、以下の書式で記載した。
土色・色相 明度・彩度・しまり・粘性・混入物
なお、しまり・粘性については強い→あり→ややあり→弱い→なし、混入物については多量→含む→少量→微量の順で度合いを示した。
8. 本書における火山噴出物（テフラ）の表記は略号を用いた。天明 3（1783）年の浅間山噴火による降下テフラ = As-A、天元元（1108）年の浅間山噴火による降下テフラ = As-B、6世紀中頃の榛名山噴火による降下テフラ = Hr-F P、6世紀初頭の榛名山噴火による降下テフラ = Hr-FA である。
9. 遺構標示の記号は、SD = 槽、SK = 土坑、P = ピットとした。
10. 観察・一覧表の数値に付けられた（ ）は遺存する現状値を、〈 〉は推定値をそれぞれ示し、単位は cm である。



目 次

例言・凡例	
目次・挿図目次・表目次・写真図版目次	
I. 調査に至る経緯	1
II. 調査の方法と経過	1
III. 遺跡の立地と周辺の遺跡	2
IV. 基本層序	7
V. 検出された遺構と遺物	7
1. 溝跡	8
2. 土坑・ピット	10
3. 遺構外出土遺物	13
VI.まとめ	14
写真図版	
抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 本遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第3図 全体図・遺構平面図	5
第4図 基本層序・溝断面図(1)	7
第5図 SD01遺物出土状況図	8
第6図 SD01出土遺物図	8
第7図 溝断面図(2)	10
第8図 土坑・ピット・断面図	11
第9図 土坑出土遺物図	12
第10図 遺構外出土遺物図	13
第11図 古墳時代前期水路推定図	15

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	3
第2表 SD01出土遺物観察表	9
第3表 土坑・ピット計測表	12
第4表 土坑出土遺物観察表	12
第5表 遺構外出土遺物観察表	13

写真図版目次

写真図版1 調査区全景	SD01全景
写真図版2 調査前状況	重機掘削風景 SD01遺物集中出土状況 SD01底面 SD01セクション 調査区から井野川方向 調査区全景
写真図版3 SD02全景	SD02セクション SD06全景 SK06遺物出土状況 SD01・SK04・09セクション SK04・09・13・14全景 遺構確認作業風景 重機埋め戻し風景
写真図版4 SD01出土遺物、SK06・07・08・09・13・14出土遺物、遺構外出土遺物	SD01出土遺物、SK06・07・08・09・13・14出土遺物、遺構外出土遺物



I. 調査に至る経緯

平成28年8月、土地所有者である三共商事株式会社から、高崎市元島名町において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である元島名旭遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年9月5日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年9月28日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、古墳時代後期と考えられる溝状遺構を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「元島名旭遺跡2」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事業取扱要項」に準じ、平成29年1月6日に三共商事株式会社と民間調査機関株式会社歴史の杜との間で契約を締結、また同日に三共商事株式会社・株式会社歴史の杜・市教委での三者協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督することになった。

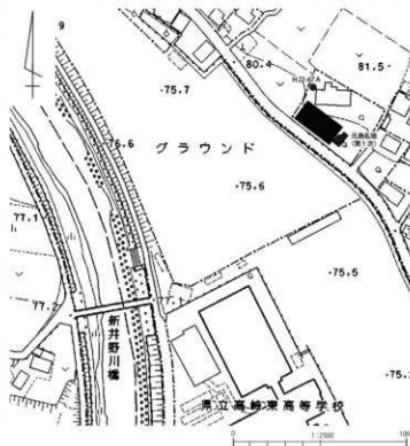
II. 調査の方法と経過

調査の方法 今回の調査対象は、開発面積 1589.34m²に対し約 397m²である。遺構確認面の検出は試掘調査の成果に基づき、重機によって地表面からLV1層上面まで掘り下げた。遺構確認作業はジョレンを用いて人力で行い、検出した遺構の形態や大きさを考慮して土層観察用のベルトを設定し、土の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら掘削を行なった。遺構の記録は、実測図の作成および写真撮影を行なった。遺構実測は光波測距儀を用いて全体図を1/100、遺構平面図を1/40、断面図を1/20の縮尺で作成した。写真記録は35mm一眼レフカメラを用いて、モノクロームネガ・カラーリバーサルフィルムの2種類を使用し、一眼レフデジタルカメラおよびコンパクトデジタルカメラも併用した。調査区全景写真は高所作業車を用いて撮影した。

遺物の採り上げは、原位置ないしそれに準じる位置で出土していると判断したものについては平面図を作成し座標値と標高値を記録して、番号を付けて採り上げた。それ以外の遺物は、出土状況の良いものは、座標値と標高値を記録し番号を付して採り上げ、出土状況の悪いものは遺構の覆土出土として一括して採り上げた。

調査の経過 発掘調査は平成29年2月1日から2月20日まで行なった。以下に調査経過の概略を記載する。

- 2月1日 調査開始。重機搬入。表土掘削開始。プレハブおよび仮設トイレ設置。作業員雇用開始。遺構確認作業開始。
- 2月2日 遺構確認作業。重機掘削終了。土山と開発地東側に防塵ネットを設置し、周辺住宅への塵土飛散対策を行なった。
- 2月3日 遺構確認作業。溝跡土坑を検出。
- 2月6日 遺構確認作業。土坑・ピット・溝の調査開始。
- 2月7日 土坑・ピット・溝調査。北東部ベルトに残し確認作業（～14日）。
- 2月8日 土坑・溝調査。
- 2月15日 土坑・溝調査。北東部ベルト記録後に除去（～16日）。
- 2月17日 高所作業車による撮影。器材の片付け。高崎市教育委員会監督員による完了確認。
- 2月20日 土山の防塵ネット撤去。重機による調査又埋め戻し。重機搬出。開発地東側の防塵ネット撤去。現場後片付けおよび器材搬出。作業員の雇用を終了。



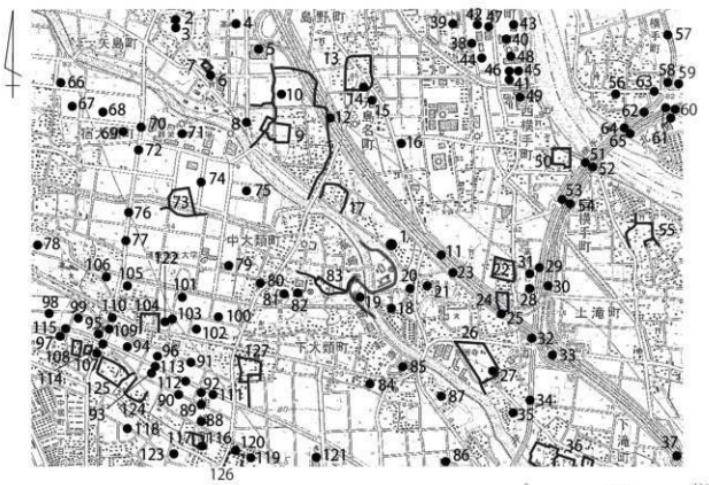
第1図 調査区位置図



III. 遺跡の立地と周辺の遺跡

遺跡の位置と環境 本遺跡は高崎市の南東部の元島名町に所在し、高崎駅から東に直線距離で約4.9kmに位置する群馬県立高崎東高等学校の北側に隣接する。現在高崎東高の南を南東方向に流下している井野川は、戦後の米軍の空中写真や明治期に作成された迅速図によれば本来本遺跡と高崎東高との間を流れていが、カスリン台風で被害を受けたため昭和26(1951)年から昭和36(1961)年までに現在の流路に整備改修されている。本遺跡が立地する井野川の左岸は前橋台地と呼ばれ、約2.1万年前の浅間山の噴火に伴って発生した前橋泥流を基盤として、その上にローム層が堆積している。『新編高崎市史 通史編Ⅰ 原始古代』の「井野川低地帯の地下断面図」によれば、井野川の地下には旧利根川の河道が存在するとされ、前橋台地の西端は、旧利根川と井野川によって削られ、河岸段丘を形成している。

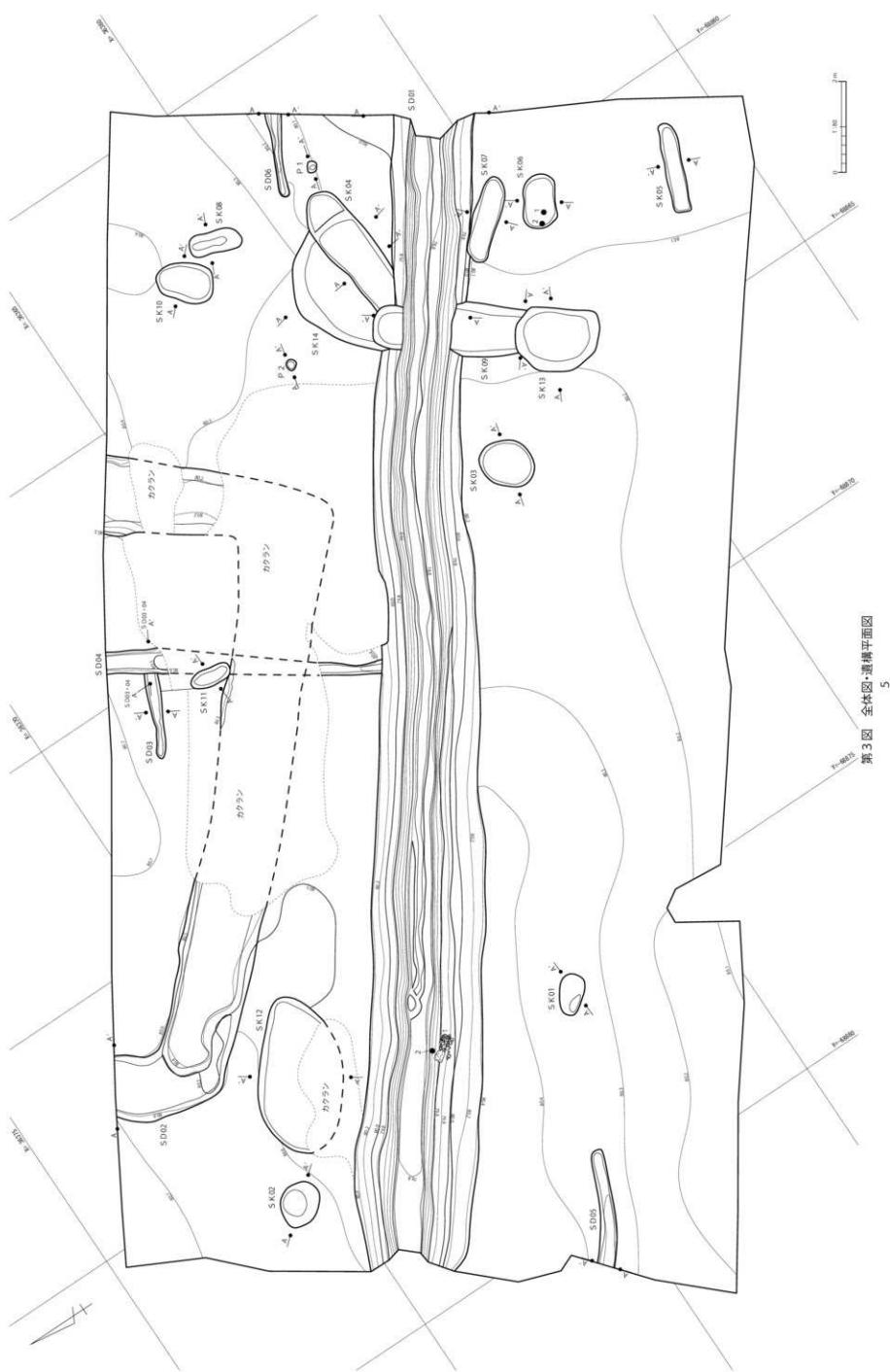
周辺の遺跡 本遺跡（1）の周辺の遺跡の内容は第1表の通りである。本遺跡が立地する井野川と利根川の間の前橋台地では、弥生時代中期までの集落遺跡がほとんど認められず、矢島町薬師遺跡（2）や鉾ノ宮遺跡（6）、元島名遺跡（8）で弥生時代後期に集落や墓域が形成されはじめ、古墳時代前期に入ると新たに、上滝遺跡（23）、上滝櫻町北遺跡〔北関東道〕（30）、下滝天水遺跡（34）でも集落が形成され、県内最古の古墳の一つである元島名将軍塚古墳（21）が出現する。また周溝墓が鉾ノ宮、元島名遺跡、西横手遺跡群（1）西免地区（49）で発見されている。本遺跡でも前期の溝が台地の溝辺に沿って南東方向に造られており、将軍塚古墳の北東側に隣接する溝を経て、上滝、上滝櫻町北〔北関東道〕、同〔長瀧線〕（29）の前期水路へ水を供給していたと考えられる。なお、対岸の高崎情報団地II遺跡（75）でも井野川に並行する前期の溝が発見されている。中期には元島名下河原遺跡（18）を除き集落が断続するが、後期に入ると再び前期の遺跡において集落が営まれ、下滝前山古墳（27）や下滝御伊勢山古墳（35）などの前方後円墳や円墳が造られている。また、6世紀初頭と中頃に降下したFe-HaとFe-HPのテフラ及びそれらに伴う洪水層下から小区域水田が、元島名諏訪北遺跡（15）や上滝町の諸遺跡（25・29・33）、萩原沖中遺跡（38～44）などで発見されている。古代では、鉾ノ宮遺跡や元島名下河原遺跡、中大類輪具遺跡（19）など集落が調査され、元島名瓦井遺跡（4）など井野川左岸の諸遺跡（5・8・11・14～16・28～34・37）、萩原沖中遺跡など利根川右岸の諸遺跡（38～44・46～49・51～54）で1108年に降下したAs-B



第2図 本遺跡の位置と周辺の遺跡

テフラで埋没した水田が調査されている。中世では、元島名城（9）や下館（36）などの城館址、元島名内出（17）などの一揆系の出城（屋敷）址、慈眼寺（26）などの武装化した寺社等、土壘や廻廊などの痕跡が数多く残存しており、一部では発掘調査も行われている。利根川右岸では西横手遺跡群「長瀧線」（51）と宿横手三浦川遺跡（53・54）で洪水層以下の水田が調査されている。近世では上灌五反畠遺跡（33）で天明三年に降下した As-A テフラで埋没した水田が調査されている他、蘿原沖中遺跡などで A テフラを処理するための土坑が調査され、西横手遺跡群「北間東道」（52）などでは扇形跡が発見されている。

第1表 周辺遺跡一覧表



第3図 全体図・構造平面図 5



IV. 基本層序

調査区壁面は東壁を除き捲乱などにより基本層序の記録に適さなかったため、東壁のSD01断面を基本層序と兼ねて観察を行なった。なおIV 1～IV 3層については、溝断面ではなく、溝壁面での観察である。

I層 表土層。色調が異なり砕石などを多く含む部分もあるが、枝番号をつけ現表土として一括して扱った。

I 1層 やや砂質で、礫を含む部分もある。

I 2層 SD02で確認。上位に砕石を多く含む。

I 3層 SD02で確認。I 2層に類似するが、やや黒色味を帯び砕石を含まない。

II層 As-B混土だが、SD01の6層よりAs-Bの含有量少ない。

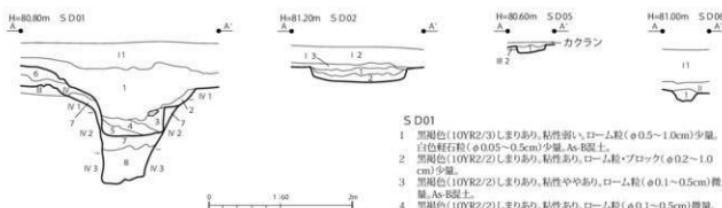
III層 ローム漸移層。暗褐色土とローム土の混土。ローム土の多いIII 1層と、比較して少ないIII 2層に細分した。

IV層 褐色土。ローム層。鉄分沈着が斑状に認められる部分がある。色調・しまり・粘性の違い、礫の含み方などに多少の差がある。しかし基本的には類似した層として認められるため、枝番号をつけIV層の中で一括した。

IV 1層 1.0～3.0cm内外の礫を含む。

IV 2層 5.0～15.0cm内外の礫を含む。しまりが強い。

IV 3層 30.0cm内外の礫を含む。しまりが強い。



基本層序

I 1 黒褐色(10YR2/3)しまりあり、粘性弱い、ローム粒・ブロック(ø 0.2～1.0cm)少量。白色軽石粒(ø 0.05～0.5cm)含む。炭化物粒(ø 0.5cm)微量。

I 2 黄褐色(10YR3/3)しまりあり、粘性弱い、ローム粒・ブロック(ø 0.5～1.0cm)微量。白色軽石粒(ø 0.05～0.5cm)含む。

I 3 黄褐色(10YR2/3)しまりあり、粘性弱い、ローム粒・ブロック(ø 0.5～1.0cm)微量。白色軽石粒(ø 0.05～0.5cm)含む。

II 黒褐色(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり、ローム粒(ø 0.1～0.5cm)微量。As-B混土。

III 1 にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり、ローム混土。

III 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)しまりあり、粘性ややあり、ローム土。III 1層より凝り少ないとされる白色軽石粒(ø 0.05～0.1cm)微量。

NV 1 黃褐色(10YR4/6)しまりあり、粘性ややあり、礫(ø 1.0～3.0cm内外)含む。

NV 2 にぶい黄褐色(10YR4/4)しまりあり、粘性あり、礫(ø 5.0～15.0cm内外)含む。

NV 3 にぶい黄褐色(10YR5/4)しまり強い、粘性あり、礫(ø 30cm内外)含む。

SD01

1 黒褐色(10YR2/3)しまりあり、粘性弱い、ローム粒(ø 0.5～1.0cm)微量。

2 3層以上10YR2/1しまりあり、粘性あり、ローム粒・ブロック(ø 0.2～1.0cm)微量。

3 黑褐色(10YR2/2)しまりあり、粘性ややあり、ローム粒(ø 0.1～0.5cm)微量。As-B混土。

4 黑褐色(10YR2/2)しまりあり、粘性あり、ローム粒(ø 0.1～0.5cm)微量。

5 黑褐色(10YR2/2)しまりあり、粘性ややあり、ローム粒(ø 0.1～0.5cm)微量。

6 黑褐色(10YR2/2)しまりあり、As-B混土。

7 黑褐色(10YR2/2)しまりあり、粘性ややあり、ローム粒(ø 0.1～1.0cm)微量。

8 にぶい黃褐色(10YR4/3)しまり強い、粘性あり、ローム粒(ø 0.5cm)微量。

SD02

1 黒褐色(10YR2/2)しまりあり、粘性ややあり、白色軽石粒(ø 0.1～0.3cm)微量。

2 黑褐色(10YR2/2)しまりあり、粘性ややあり、ローム混土・白色軽石粒(ø 0.1～0.3cm)微量。

SD05

1 明褐色(10YR3/4)しまりややあり、粘性ややあり、ローム混土。白色軽石粒(ø 0.1～0.3cm)微量。

SD06

1 明褐色(10YR3/3)しまりあり、粘性ややあり、ローム粒(ø 0.1～1.0cm)微量。

2 白色軽石粒(ø 0.05～0.1cm)微量。

第4図 基本層序・溝断面図(1)

V. 檜出された遺構と遺物

本遺跡では古墳時代と考えられる溝1条、古代以前の溝2条と土坑8基、As-B混土で埋没した溝4条(SD01の掘り直しを含む)と土坑6基、近世以降のピット2基が検出された。遺構にはAs-A混土を覆土とするものやAs-B混土を覆土とするもの、As-AとAs-Bを含まないものがあり、ある程度の時期が想定できる。

遺物は、弥生時代の石器・土器、古墳時代から古代までの土器類や須恵器、中世の無釉の軟質陶器、近世以降の陶器皿や瓦などが総破片数530点ほど出土しているが、直接遺構の時期を示す状況では出土しなかった。破片数では480点ほどとなる。古墳時代を中心とした土器類が最も多い。しかし出土遺物は細片が多く、時期や部位の特定が困難なものもその半数以上を占めた。その中で比較的まとまって出土した遺物や、各遺構の遺物の出土傾向を示すものを掲載した。



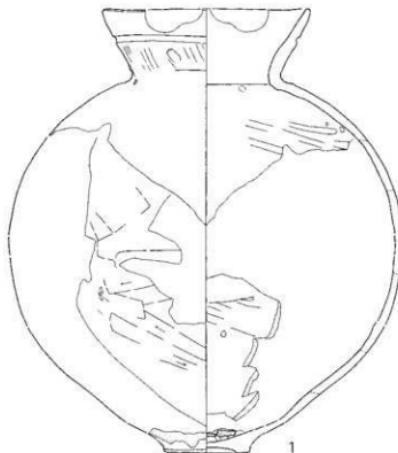
1. 溝跡

6条を検出した。古墳時代と考えられるSD01以外は、覆土や層位から古代以前と中世以降の時代が考えられる。

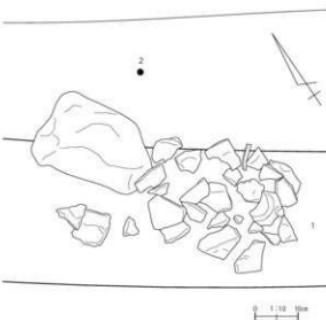
1号溝跡 (SD01、第3・4・5・6図:写真図版1・2・4)

位置:座標 (X = 36354, Y = -68857) と座標 (X = 36370, Y = -68879) の間に位置する。**形態:**断面は上半が逆「ハ」字状に開き、下半は筒状で下方へいくに従い幅が狭まる形状で、いわゆる漏斗状を呈する。走向は北西—南東方向で、主軸方向は N-55° W である。南東に下がる傾斜で、段上の底面の比高差は 12cm である。上端幅約 170 ~ 340cm、深さ約 130 ~ 170cm を測る。底面は、北西側は平坦で底面幅約 40 ~ 60cm となるが、溝北西端から約 520cm で北東側の半分ほどが 1段下がり、南東側までそのまま続いている。段差の比高差は約 2 ~ 8cm である。

概要:本道構は調査区の中心を通る。SK04・09・14 と重複しており、切り合いからは本道構が最も古い。SD04 とも重複し、切り合は不明だが覆土から本道構の方が古いと考えられる。断面観察によれば溝には最低 2 層期が考えられ、5 層までが再掘時の掘り込みとなる。1 次調査で検出された溝 (SD01) に続く溝と考えられる。**遺物:**遺物は上層からの出土が大半であり、明確に溝の年代を決定し得る遺物は出土していない。土師器 53 点、須恵器 3 点、陶磁器 1 点が出土している。北西の上層 (7 層) の右壁際から土師器片 (No. 1) がややまとまとて出土し、出土状況を平面図化して採り上げた。掘り込みなどは確認できず、溝の埋没過程での遺物と考えられる。No. 1 は壺の口縁部・胴部片で、口縁部に沈線が 1 条施される。底部片も出土しており、接合しなかったものの出土状況や胎土・調整などから同一個体であると考えられる。胴部は球状を呈し、横あ

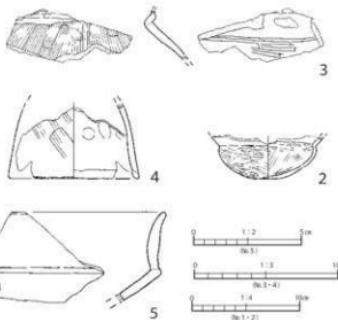


1



第5図 SD01遺物出土状況図

8



第6図 SD01出土遺物図



第2表 SD01出土遺物観察表

遺物 番号	種別	形状	残存部位	高さ 幅	口径 幅	底径 厚さ	重量	外表面色	内表面色	主な文様・調整等		備考
								5/YR 5/6	明治期 6/4	に青い 模様	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：ナナデ、模様あり	
1 土師 盆	口～底 1/3	(口)直 (底)	(41.0) (19.0)	7.8	—	5/YR 5/6	明治期 6/4	に青い 模様	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：ナナデ、模様あり	縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：ナナデ、模様あり	縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：ナナデ、模様あり	
2 土師 盆	頭～底	(3.9)	(11.0) (2.0)	—	5/YR 5/6	赤褐	5/YR 4/6	赤褐	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：(D) 横ミガキ（口～底）斜ミガキ、底部近くに 工具跡	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：(D) 横ミガキ（口～底）斜ミガキ、底部近くに 工具跡		
3 土師 S字甕	口～肩	(3.1)	—	—	10 YR 6/3	に青い 模様	10 YR 6/3	に青い 模様	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縁）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縠）縁、ナナデ（縁～側）縁、斜ナナデ（底）～	白色粒子	
4 土師 S字甕	台盤	(5.2)	—	(9.0)	—	10 YR 6/3	に青い 模様	10 YR 6/3	に青い 模様	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縁）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縠）縁、ナナデ（縠～側）縁、斜ナナデ（底）～ 内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縠）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縠）縁、ナナデ（縠～側）縁、斜ナナデ（底）～	内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縁へナナデ（縠）縁地部台面に 模様、斜ミガキ（縠）縁、ナナデ（縠～側）縠、斜ナナデ（底）～ 内：(D) 横ナギ、沈殿アカ（口～底）縠、ナナデ（縠～側）縠、斜ナナデ（底）～	白色粒子
5 土師 瓢	口～底	(4.2)	—	—	5/YR 5/8	明治期 5/8	5/YR 5/8	明治期 5/8	内：(D) 横ナギ（体）ナナデ 内：(D) 横ナギ（体）ナナデ	内：(D) 横ナギ（体）ナナデ 内：(D) 横ナギ（体）ナナデ	白色、赤褐色粒子	

るいは斜方向のヘラケズリが施される。5～6世紀代の年代が考えられる。No. 2は壙の頸部～底部片で、内面には赤彩の痕跡が認められる。全形が不明であるが、後述するS字状口縁台付壙とはほぼ同時期と考えて副輪はないであろう。覆土中の一括遺物の中では、実測に耐えうる遺物として以下の土師器片が3点ある。No. 3はS字状口縁台付壙の口縁部～肩部片で、外面の肩部平行線が費している点から田口一郎氏の編年（坂口 1981）によるIV期類で、III期～V期（4世紀中葉～5世紀初頭）に比定される。No. 4は同じく台部の破片である。No. 5はいわゆる模倣杯で、口縁部は外反し、浅い部体をもつ。坂口一氏の編年（坂口 1986）ではIV期～V期に該当し、6世紀第2四半期～第3四半期に比定される。掲載した以外にも複数の模倣小片が出土している。 時期：出土した遺物から、4世紀中葉～5世紀初頭以降が開削の上限となり、6世紀後半が下限と考えられる。また断面観察から、埋没途中あるいは埋没後に振り直した痕跡が認められる。1次調査ではAs-Bの1次堆積層が確認されているが、本調査では確認できなかった。しかし溝がAs-B混土層で完全に埋設している点は共通しており、振り直し後の溝が最終的にAs-B降下後に埋没したという状況がうかがえる。

2号溝跡 (SD02、第3・4図・写真図版3)

位置：座標 (X = 363611, Y = -68860) と座標 (X = 36373, Y = -68874) の間に位置する。 形態：断面形状は皿状を呈する。平面形状は調査区の北東壁から「コ」字状に検出され、調査区外に続いている。残存部が良好な西側で上端幅約132～168cm、深さ約13～24cm、底面幅約108～124cmを測る。 概要：溝の東側はベルトを設定して道構の確認に努めたが壊乱で壊されており、立ち上がりの痕跡が部分的に残っている程度であった。しかし北東壁付近では調査区外に続く形で検出された。平面形状から何らかの区画線と推定されるが、覆土からは流水の痕跡は認められず、また溝の内側では道構なども認められなかった。 遺物：覆土から土師器の細片が3点、須恵器の壺、甕類の胴部片が1点出土しているが、実測に耐えうるものはない。 時期：覆土がAs-B混土であり、中世以降と考えられる。

3号溝跡 (SD03、第3・7図)

位置：座標 (X = 36366, Y = -68864) と座標 (X = 36368, Y = -68867) の間に位置する。 形態：断面形状は箱状を呈する。走向は北東～南東方向で、主軸方向はN-65°Wである。南東に下がる傾斜で、比高差は10cmである。上端幅約18～28cm、深さ約6～8cmを測る。 概要：直線的に走向し、SD04と直交に近い形で重複する。切り合いからは本道構の方が古いが、覆土は類似している。 遺物：出土していない。 時期：覆土がAs-B混土であり、中世以降と考えられる。

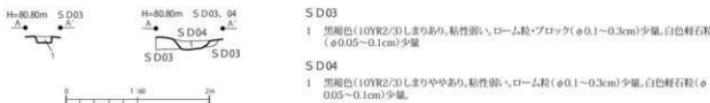
4号溝跡 (SD04、第3・7図)

位置：座標 (X = 36362, Y = -68863) と座標 (X = 36368, Y = -68868) の間に位置する。 形態：断面形状はU字状を呈する。走向は北東～南西方向で、主軸方向はN-35°Eである。南西に下がる傾斜で、比高差は11cmである。上端幅約20～56cm、深さ約3～15cmを測る。 概要：直線的に走向し壊乱で痕跡がなくなるが、その延長線上に再び痕跡が確認でき、SD01と重複する。切り合ひは不明だが、覆土から本道構の方が新しいと考えられる。直交する形でSD03とも重複するが、切り合ひから本道構のほうが新しい。SD03に類似した覆土であるが、比較してしまが弱い。

遺物：出土していない。 時期：覆土がAs-B混土であり、中世以降と考えられる。

5号溝 (SD05、第3・4図)

位置：座標 (X = 36364, Y = -68878) と座標 (X = 36367, Y = -68882) の間に位置する。 形態：断面形状は皿状を呈する。走向は北西～南東方向で、やや東に湾曲する。主軸方向はN-62°Wである。北西に下がる傾斜で、3cm



第7図 溝断面図(2)

の比高差がある。上端幅約28~36cm、深さ約1~8cmを測る。概要：計測値からは、他の北西~南東方向に走行する溝と傾斜が逆である。しかし溝底部は部分的な凹凸があるものの全体的には平坦な底面である。遺物：出土していない。時期：覆土がⅢ層に似ており、古代以前と考えられる。

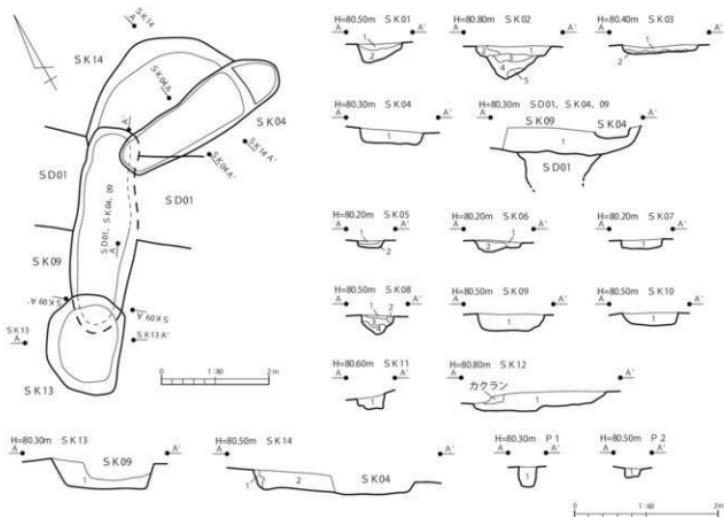
6号溝 (SD06 第3・4図；写真図版3)

位置：座標(X = 36357、Y = -68856)と座標(X = 36359、Y = -68858)の間に位置する。形態：断面形状はU字状を呈する。走向は北西~南東方向で、主軸方向はN-64°-Wである。南東に下がる傾斜で、比高差は9cmである。上端幅約16~36cm、深さ約9~14cmを測る。概要：直線的に走行する溝で、1次調査で検出された溝(SD02)に続くものと考えられる。遺物：出土していない。時期：覆土がAs-B混土で被覆されていることから、古代以前と考えられる。

2. 土坑・ピット (SK01~14、P 1~2、第8・9図；写真図版3・4)

本遺跡では土坑14基、ピット2基が検出された。各土坑・ピットの詳細は第3表に記載している。調査区の南東側にやや集中する傾向がある。As-B混土を覆土とするSK04・07・09・11~13と、As-A混土を覆土とするP 1・2がある。それ以外のAs-BやAs-Aを含まない覆土をもつ土坑はSK01~03・05・06・08・10・14がある。SK08は平面および底面形態はやや不定形であるが、覆土に焼土や炭化物を含む。SK14は切り合ひからSK04より古く、覆土に古墳時代の遺物を含む。ピットは掘立柱建物の可能性も考慮に入れたが、周辺では確認できず、覆土からも積極的に柱穴とは断定できない。各々の詳細な構築時期や性格は不明であるが、覆土から古代以前と中世以降(As-B降下以降)、近世以降(As-A降下以降)に大別できる。

10基の土坑で遺物が確認されたが、総じて出土量は多くない。その中でSK06は比較的多くの遺物が出土したが、底面直上からの出土ではない。遺物は小破片が多く、実測に耐えうる遺物としてはSK06・09・14で出土した土師器片とSK13で出土した石器がある。No. 6・7はSK06で出土した甕の口縁部~肩部片と肩部~胸部片で、接合しないものの、胎土・調整などから同一個体と見なされる。残存する上半部からは球形状を呈すると考えられ、外面はヘラケズリを施す。古墳時代に比定できる。ほかに土師器細片と須恵器環蓋の破片が出土しており、須恵器環蓋は丸い痕跡が認められることから、7世紀第3四半期~8世紀第2四半期までの時期が考えられる(坂口・三浦 1986)。覆土から想定される土坑の年代の古代以前と齋藤はない。No. 8はSK07で出土した模倣环の口縁部~体部の破片で、口縁部が短く外反する器形は坂口編年でVI段階(6世紀第4四半期)に該当すると考えられるが、前述のように土坑自体は覆土からAs-B降下後の年代である。No. 9はSK08で出土した甕の口縁部~頸部片で、口縁部断面が「コ」字状の兆候を見せる段階と考えられ、9世紀第2四半期に比定できる(坂口・三浦 1986)。覆土から想定される土坑の年代の古代以前と齋藤はない。No.10はSK09で出土した环の口縁部~体部の破片で、短い口縁部と浅い体部をもつ器形は坂口編年でVI段階~VII段階(6世紀第4四半期~7世紀第1四半期)に該当すると考えられる。土坑自体は覆土からAs-B降下後の時期が考えられる。No.11はSK13で出土した石核で、石材は安山岩と考えられる。表面は風化している。土坑自体は覆土からAs-B降下後の時期が考えられる。No.12はSK14で出土した甕あるいは瓶の口縁部~頸部の破片で、口縁部の外反は弱く胎土に砂礫を多量に含むのが特徴である。5世紀第4四半期~6世紀第1四半期(坂口 1986・1987)に該当すると考えられる。遺物としてはこの1点のみなので、遺物の年代は土坑の年代の上限を示すに過ぎない。土坑自体は覆土から古代以前の時期が考えられる。



第8図 土坑、ピット平・断面図

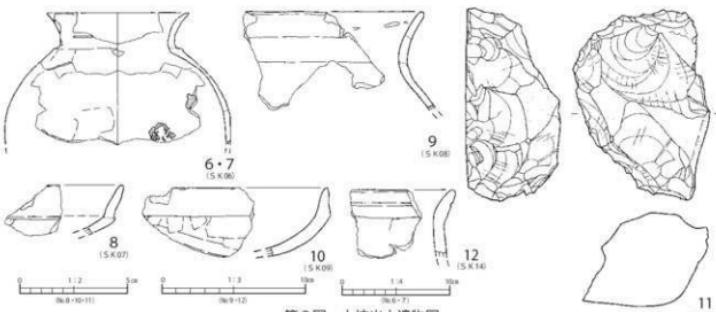


第3表 土坑・ピット計測表

測量番号	X軸	Y軸	平面形状	断面形状	上輪方位	長軸	短軸	幅深	覆土	遺物	時期	備考
SK01	~36362	~68877	楕円形	逆台形	N-45°W	90	52	36	C	H2, S4	古代以前	第3・8回
SK02	~36364	~68877	楕円形	逆二角形	N-36°W	102	82	44	C	—	古代以前	第3・8回
SK03	~36372	~68877	楕円形	楕円形	N-44°E	122	100	10	C	—	古代以前	第3・8回
SK04	~36357	~68864	楕円形	楕円形	N-86°E	(334)	101	19	B	H7, K1	As-B 領下以降	SK09・14を切る 第3・8回
SK05	~36350	~68858	楕円長方形	楕円形	N-68°W	199	41	9	C	—	古代以前	第3・8回
SK06	~36353	~68860	楕円長方形	四を含む四角形	N-64°W	120	71	17	C	H42, S1	古代以前	第3・8回
SK07	~36350	~68862	楕円長方形	楕円形	N-42°W	190	65	13	B	H2	As-B 領下以降	第3・8回
SK08	~36360	~68857	楕円形	逆三角形	N-21°E	116	50	26	C	H11	古代以前	第3・8回
SK09	~36355	~68861	長方形	逆台形	N-36°E	(312)	120	23	B	H1, S1, L1	As-B 領下以降	SK09に切られるSK13・SD01 を含む 第3・8回
SK10	~36361	~68857	楕円形	逆台形	N-43°E	120	88	18	C	H2	古代以前	第3・8回
SK11	~36365	~68865	楕円形	楕円形	N-9°E	93	42	17	B	—	As-B 領下以降	第3・8回
SK12	~36368	~68872	楕円形	逆台形	N-56°W	332	(186)	26	B	H62, S1, C1	As-B 領下以降	第3・8回
SK13	~36354	~68862	楕円形	逆台形	N-36°E	183	140	34	B	H6, L1	As-B 領下以降	SK09に切られる 第3・8回
SK14	~36358	~68858	楕円形	逆台形	N-60°E	(179)	132	26	C	H5	古代以前	SK04に切られる 第3・8回
P 1	~36357	~68857	楕円形	U字形	N-59°W	26	22	27	A	—	近世以降	第3・8回
P 2	~36360	~68860	円形	逆台形	N-17°W	23	23	12	A	—	近世以降	第3・8回

※覆土分類：A = As-A を含む黒褐色～黒褐色土、B = As-B を含みやや砂質の黒褐色土、C = その他の（As-A 及び As-B を含まない）

遺物略記：Y = 有土遺物、H = 土師器、S = 磁器器、C = 陶器器、K = 瓦、L = 石器



第9図 土坑出土遺物図

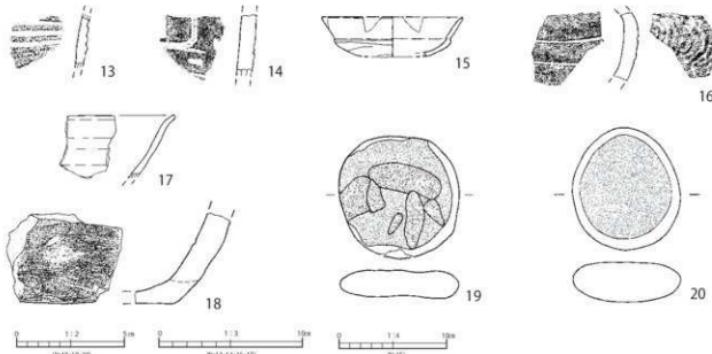
第4表 土坑出土遺物観察表

測量番号	種別	名稱	残存部位	高さ	口徑	底径	壁厚	重量	外面色調	内面色調	主な文様・調整等	備考
6	土師	甕	口・側	(5.6)	(13.0)	—	—	3.2Y R	相	X: (12) 横ナデ (目) 横ハラケズリ 内: (12) 横ナデ (目) 横ナデ	アと結合しないが同 一側体か 角閃石か	
7	土師	甕	肩・側	(6.5)	—	—	—	5 Y R	相	外: (肩・側) 横ハラケズリ 内: (肩・側) ナデ, 付着物あり	6と接合しないが同 一側体か 角閃石か	
8	土師	甕	口・側	(2.3)	—	—	—	5 Y R	相	内: (2) 横ナデ (目) ハラケズリのちナデか 内: (2) 横ナデ (目) ナデ	赤褐色粒子	
9	土師	甕	口・側	(6.8)	—	—	—	5 Y R	にぶい 4/8	内: (2) 明治期 外: (2) 横ナデ (目) ナデ	白色粒子	
10	土師	甕	口・側	(3.2)	—	—	—	5 Y R 5/6	相 明治期	内: (2) 横ナデ (目) ハラケズリ 外: (2) 横ナデ (目) ナデ	角閃石か	
11	石器	石核	—	8.8	6.2	4.3	254	7.5 Y R 8/2	周白 明治期	上端と左側面に剥離面、上面と下面に滑溜面。 外: (2) 横ナデ (目) ナデ	黑色安山岩か 碧玉の剥離面か	
12	土師	甕	口・側	(4.7)	—	—	—	2.5 Y R 5/8	相 明治期	内: (2) 横ナデ (目) ナデ	φ 0.5 ~ 4.0mm の砂 質多量含む 角閃石か	



3. 遺構外出土遺物（第10図：写真図版4）

遺構確認面で弥生土器片・土師器片・須恵器片・陶磁器片・瓦片・石器などが出土しているが、土師器片が主体をなす。No.13は外面に平行沈線が、No.14は逆「L」字状に屈曲する沈線が残る歯か簾と考えられる胸部破片で、弥生時代中期～後期の時期が考えられる。ほかに沈線を施す弥生土器片と考えられる破片が2点出土している。No.15は土師器の模倣片で、口縁部～体部の破片である。外反し浅い体部をもつ器形で、1世紀後半～2世紀前半（坂口1986）と考えられる。ほかに6世紀～7世紀代と考えられる模倣片小片が複数出土している。No.16は須恵器壺・壺類の肩～胴部片で、外面に沈線と波状文を、内面に同心円当て具痕をもつ。No.17は环・椀類の口縁部～体部の破片である。酸化焰焼成の須恵器で、10世紀代と考えられる。No.18は無釉の軟質陶器の体部～底部にかけての破片で、外面が炭素吸着による黒色を呈していることから、いわゆる瓦質土器とも呼ばれる。やや外反して立上がり、鋸などの器形が考えられる。中世に比定できる。No.19・20は磨石で、共に長さ、幅が5～6cmに納まる小型で扁平な形状をもつ。吉ヶ谷系の土器片が伴出していることから、同時期のものである可能性も考えられる。



第10図 遺構外出土遺物図

第5表 遺構外出土遺物観察表

目録番号	種別	基盤	残存部位	高さ	口径	底径	成形	厚さ	重量	外面色調	内面色調	主な文様・調整等	備考
13	弥生	土	胸	(3.7)	—	—	—	—	5.9g	5YR 6/4	5YR 5/6	明治期 外：表面または板状工具による繊維ナメのち3条の平行沈線か残る 内：繊維ナメ	φ 0.5～1.0mmの砂 礫混在
14	弥生	土	歯・簾	(4.2)	—	—	—	—	10.9g	10YR 3/3	10YR 6/4	にひら 内：逆「L」字状の沈線。他にも工具痕跡残る（文 字なし）	右页、角閃石か 無
15	土師	环	口～体	(3.6)	(13.0)	—	—	—	5.9g	5YR 6/9	5YR 6/9	外：(口) 繊維ナメ(3枚) ヘラナメ 内：(口) 体) 繊維ナメ	
16	須恵	壺・甕	肩～胸	(4.6)	—	—	—	—	5.9g	5YR 6/1	5YR 6/1	外：平行沈線2条認められ、間に繊維状文施す	白色粒子
17	須恵	环・椀	口～体	(4.3)	—	—	—	—	10.9g	10YR 2/4	10YR 2/4	外：(口) 体) 繊維ナメ 内：(口) 体) 繊維ナメ	酸化焰焼成
18	軟質陶器	磨か	体～底	(4.2)	—	—	—	—	2.5g	2.5Y 3/1	2.5Y 4/1	内：(口) 体) 繊維ナメ 外：(口) ケズリのち繊維ナメ(底) ヘラケズリのちナメ 内：(底) 繊維ナメ(底) ナメ	白色粒子、角閃石か 無 内：(底) 繊維ナメ(底) ナメ
19	石器	磨石	ほぼ完形	5.5	5.5	1.3	66	10.9g	10YR 4/3	10YR 4/3	内面とて全面磨き面、数条の光沢をもつ滑面あり 内：(底) 黄褐色	磨石完形	
20	石器	磨石	完形	5.6	5.0	1.8	77	5.9g	5Y 5/1	5Y 5/1	内面磨き面	磨石完形	



VI.まとめ

本遺跡では古墳時代と考えられる溝1条、古代以前の溝2条と土坑8基、As-B混土で埋没した溝4条（SD01の掘り直しを含む）と土坑6基、近世以降と考えられるピット2基を調査した。ここではある程度時期が特定できる遺構や特徴的な遺構を中心に、周辺遺跡の事例にも触れつつまとめとしたい。

古墳時代の遺構としてはSD01がある。調査区内においては微高地の縁辺に沿って北西—南東方向に直線的に延びており、前述した通り断面形状は漏斗状を呈し、古墳時代前期が開削の上限となる。このような溝は井野川左岸の周辺遺跡では確認できず、管見の限りでは本遺跡の南東方向に位置する元島名将軍塚古墳の調査で、周囲の外側から検出された溝（溝4。以下「溝4」と称する）が該当する。この溝は埴丘東側面周縁外に位置し、おむね北西—南東方向に走行する。上幅約90～150cm、下幅約30～70cm、深さは現地表面から約170cmでローム面からは約120～130cmと報告されている。この溝は埴丘の後方部側においても前方部側においても、周囲の外側ラインに呼応して折れ曲がるような兆候は認められず、それぞれ調査区外の北西および南東方向に延びていく様相を呈する。出土土器から、溝が開削されたのは古墳構築の時期より古く考えられており、古墳構築との関連の有無が検討されている（飯塚・田口1981）。覆土の上からは、本調査および1次調査でAs-B降下後に完全に埋没した様相がうかがえるに対し、それが観察できないことや、逆に溝4ではトレーンの一部でHr-FAまたはHr-FAの水性堆積層によって最上層に埋没しているのが認められるが本調査や1次調査では認められないなど、相違する部分もある。しかし溝の断面形状や南東方向へ下がる傾斜、遺物の出土量中層以上で認められる点などは共通している。SD01で出土したS字彫片（No.3）は、溝4の上層出土の遺物がIV類を含むことから、上層出土遺物に相当するものと考えられる。若狭徳氏は、元島名将軍塚古墳が新たに進出したこの地域の開拓者の墳墓であり、当時の社会システムが水利開発を主軸に据えていたと想定している（若狭2007）。今回調査されたSD01が元島名将軍塚古墳調査時に検出された溝4に続く溝であれば、古墳時代前期の水利開発に伴うものと考えられるだろう。しかしSD01と溝4は直線距離にして約250m離れており、あくまで溝の断面形状や遺物などから共通性が認められるに過ぎない。その証明には考古学的な調査による確認が必要であり、今回はその可能性を指摘するにとどめる（第11図）。

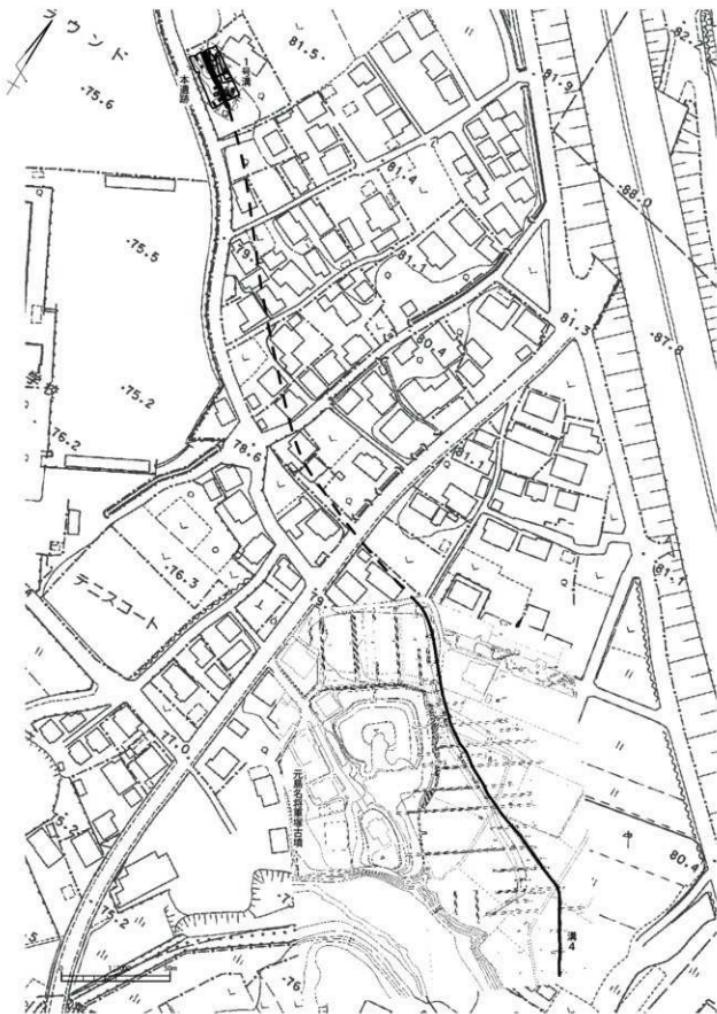
井野川右岸側では本遺跡の北西に位置する高崎情報團地遺跡や、その東側に隣接する高崎情報團地II遺跡で古墳時代前期の灌漑用水路と考えられる溝が検出されている。高崎情報團地II遺跡で検出されたSD99は、ほぼ直線的に走行し300m以上にわたって続くことが確認されており、本遺跡のSD01を灌漑用水路と想定した場合の用水の供給先としては、既調査の遺跡では古墳時代前期の水田が検出されている上流遺跡や上流櫻木遺跡が候補にあげられるだろう。

古代以前の遺構としてはSK08とSK14がある。出土遺物からはSK08は9世紀第2四半期、SK14は5世紀第4四半期～6世紀第1四半期と考えられる。共に覆土中からの出土であるため遺物の時期は下限を示すもので、覆土にAs-Bが認められないことから上限はAs-B降下以前だと考えられる。またSK14はAs-B混土を覆土とするSK04と重複しそれより古いので、As-B降下以前との推定が補強できるよう。

中世以降とした遺構は、覆土にAs-Bを含む溝、土坑があげられる。その中でSD02は調査区内で平面形状が「コ」字状に検出された溝である。東側の屈曲からすれば、東側の推定線よりも緩やかな屈曲となるかもしれない。同じ井野川左岸の鉢ノ宮遺跡や元島名遺跡などでは方形周溝が検出されているが、覆土や遺物の点からも該当しないと考えられ、何かしらの区画溝となる可能性がある。

参考文献

- 飯塚勝彦・田口一郎、1981「元島名将軍塚古墳－前方後方墳の外郭施設遺跡調査」高崎市教育委員会
- 坂口一、1989「古墳時代後期の土器の編年－三才寺遺跡を中心とした土器群と別器群の平行關係－」『群馬文化』第208号、群馬県地域文化研究協議会
- 坂口一、1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年－其伴隨性による土器形式群別の検討－」『研究紀報』4、(財)群馬県歴史文化財調査事業団
- 坂口一・三浦京子、1986「奈良・平成時代の土器の編年－仔細の観察と其伴隨性による土器形式群別の検討－」『群馬史研究』第24号、群馬県
- 高崎市史編さん委員会、1995「新編高崎市史資料編3中世1」高崎市
- 高崎市史編さん委員会、1995「新編高崎市史資料編1開始古代1」高崎市
- 高崎市史編さん委員会、2000「新編高崎市史資料編2原始古代Ⅱ」高崎市
- 渕井区・山本ジェームズ・神田謙、2011「平成22年度市内遺跡発掘調査報告書」高崎市教育委員会
- 坪井利弘、1992（1976）「日本の瓦屋根」理工社
- 松井信重、2003「古き谷筋の石畳文化－群馬県石畳平石塀－」「埼玉考古」38、埼玉考古学
- 羽扶景、2007「古墳時代の水利用社会研究」学生社



第11図 古墳時代前期水路推定図(高崎市発行1/2,500「都市計画基本図」および飯等・田口1981付図に一部改変・加筆)

写 真 図 版





1 調査区全景 北東から



2 SD 01 全景 南東から



写真図版 2



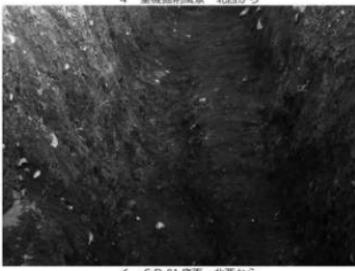
3 調査前状況 南東から



4 重機作動風景 北西から



5 SD 01 遺物集中出土状況 南西から



6 SD 01 底面 北西から



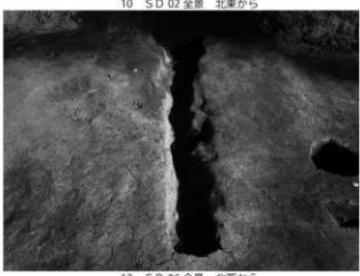
7 SD 01 セクション 北西から



8 調査区から井野川方向 北東から



9 調査区全景 南東から





写真図版 4

S D 01



2

3



4



5

S K 06



6



7



8



9



10

S K 13



11



12

遺構外



13



14



15



16



17



18



19



20



発掘調査報告書抄録

ふりがな 書名	もとしまなあさひいせき2 元島名組遺跡2
刷書名	建売分譲住宅建設に伴う埋藏文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第394集
編著者名	小宮山達・村上章義・高崎市教育委員会文化財保護課
編集機関	株式会社歴史の杜
所在地	〒377-0425 群馬県吾妻郡中之条町西中之条 723-9
発行年月日	平成29年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとしまなあさひ 元島名組2	たかさきし 高崎市 もとしまなまち 元島名町 あさひ 字組 ばんち 281番地 1,2,3,4,5	102024	690	36° 19' 31"	139° 3' 59"	2017.02.01 ~ 2017.02.20	397m ²	建売分譲住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元島名組遺跡 (第2次調査)	(その他) 包含地	縄文		石核	
	(その他) 包含地	弥生		弥生土器(壺、甕等)	
	(生産) 田畠	古墳	前期溝1	土師器(球頭壺、S字甕、模倣壺等)、須恵器、扁平磨石	元島名将軍塚古墳の溝4に接続か。井野川からの取水用水路か。
	(その他) 包含地	古代以前	溝2、土坑8	土師器(甕等)	
	(その他) 包含地	中世以降	溝4、土坑6	軟質陶器(鏡等)	溝は古墳時代前期の溝の再利用を含む。
	(その他) 包含地	近世以降	ピット2	陶磁器、瓦(軒桟瓦)	

要約	古墳時代前期の溝を検出し調査を行なった。構築時期や断面形状から元島名将軍塚古墳の北東に隣接する溝4に接続し、上流遺跡や上流櫛町北遺跡などの前期水田に水を供給する用水路と推定される。本遺跡周辺の前橋台地へ人が本格的に進出し、県内最古の古墳の一つである元島名将軍塚古墳を造成する端緒となった土木遺構として重要である。
----	--



抄録図 遺跡の位置 (国土地理院 1/25,000 地形図「高崎」)



高崎市文化財調査報告書 第394集

元島名旭遺跡2

—建売分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成29年7月20日印刷

平成29年7月31日発行

編集 株式会社 歴史の杜

発行 高崎市教育委員会

株式会社 歴史の杜

三共商事株式会社

印刷 朝日印刷工業株式会社